愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第39巻　第2号　1～23　1993

人格の対人的診断法の研究（7）

―― 対人関係の構え：その代表例 ――

戸　苅　正　人
（教育心理学研究室）

（平成4年10月12日受理）

Ⅰ　8種の代表例について

1　は　じ　め　に

筆者の，人格の対人的診断法の研究は1957年，Leary 編集になる体系的主著，「Interpersonal diagnosis of personality」[4] との出会いに始まる。以来，今日まで，36年間にわたり，人格心理学の授業を通した実践研究により，日本改訂版の作成に努めてきた。

①　改訂の目的

筆者の最終目的は，《対人関係の構えとしての人格》の，多層的診断法の開発にある。直接には，Leary, et al. の対人的診断法の改訂にある。

その目的は，既報の通り，次の三点にある。第一は，日本人向きの改訂版を作成すること。第二は，病者の異常人格の診断という，せまい臨床分野から解放し，正常人（普通人）の人格の研究と理解に活用すること。さらに，第三には，専門家向きの臨床的目的や，研究的目的を超えて，広く普通人の自己理解と他者理解に活用できるよう，簡略化，平易化することにある。

②　改訂の経過

筆者の改訂の試みは，先づ，ＩＣＬ日本改訂版の作成と，その採点法の改訂からスタートした。[20] 次いで，人格の対人的理論のよって立つ理論的基礎の補完，[21] 人格のレベルの分類と，その測定法の統一とデータ表示法の簡略化，[22] グラフと診断図の改訂，[23] 規範的アプローチに代わる，個性記述的アプローチによる新換算表の作成，[23,24] などを経て，人格の多層的診断法の改訂 [25] により，簡略化，平易化に努めてきた。

③　今回の目的

人格の多層的診断も，単に診断用語の組合わせのみでは，具体的な人間像は不明確である。たとえば，〈同調的－従順的，潜在的な不信の感情－さらに深い養護の感情を秘めた人物〉と診断しても，それだけでは漠然としており，その人間像は明確には感じられない。

そこで，今回は，〈対人関係の構えとしての人格〉の代表例について，詳しく解説することにする。

2　8種の純粋型

① 代表例

先報のように，筆者の人格の多層的診断においては，顕在的自己の二つのレベル（Ⅰ-S，Ⅱ-S）と，潜在的自己の二つのレベル（Ⅲ-H，Ⅲ-O）の診断用語を結びつけ，さらに，表現されない無意識的自己（Ⅳ）を加えた，5層の人格構造について，総合的診断をするものである。[25]（Table 1）

Table 1　レベルとデータの分類

レベル	データの分類	
Ⅰ　公共的表現	Ⅰ-S：公共的自己	顕在的自己
Ⅱ　意識的表現	Ⅱ-S：意識的自己	顕在的自己
Ⅲ　象徴的表現	Ⅲ-H：象徴的自己（前意識的自己Ⅰ）	潜在的自己
〃　〃	Ⅲ-O：象徴的他者（前意識的自己Ⅱ）	潜在的自己
Ⅳ　表現されないもの	Ⅳ　：無意識的自己	
Ⅴ　価値	Ⅴ　：理想的自己	

しかし，顕在的自己の診断には，256通りの診断カテゴリーがある。このそれぞれに，256種の潜在的自己の診断が組合わされる。したがって，5層にわたる多層的診断では，256×256＝65,536種の診断カテゴリーがある。さらに，原法とは別に，筆者は，レベルⅣ表現されない動機（無意識の自己）を用いている。これを加えれば，65,536×16＝1,048,576通りの組合わせがあり得る。

さらに，レベルⅤ価値のレベル（理想的自己）を加えれば，さらに16倍となり，16,777,216通りの組合わせがある。これが，筆者の場合の最終的類型である。[25] したがって，そのすべてについての考察は，至難の業というべきであろう。

そこで，代表例としても，ここで取上げられるのは，顕在的自己の診断のみである。それも，顕在的自己の二つのレベルで，診断が一致する《純粋型》のみに限られる。

〈例〉　Ⅰ-S ― Ⅱ-S
　　指導的―指導的（11）

② 純粋型

レベルⅠとⅡで診断の一致している純粋型についても，それぞれに，程度の区別がある。穏やか（適度）なものと，極端（高度）なものとがある。この程度の別を考慮すれば，次のようになる。

〈例〉　Ⅰ-S　　Ⅱ-S
　　指導的　―　専制的
　　（1～1′）　（1″～1‴）

したがって，顕在的自己の《純粋型》のみでも，8種の診断カテゴリーのそれぞれに，4通りの組合わせ（総計32通り）があり得る。

〈例〉

AP：指導的（専制的）：11，11″，1″1，1″1″：（指導的－指導的，指導的－専制的，専制的－指導的，専制的－専

Table 2　顕在的自己の診断カテゴリー

「対人的変数の符号」	「診断符号」	「対人関係の構えの診断用語」〈穏やかな（適度の）〉	〈極端な（高度の）〉	
AP	1	指導的	専制的	1″
BC	2	競争〃	自己愛的	2″
DE	3	攻撃〃	サド　〃	3″
FG	4	反抗〃	不信　〃	4″
HI	5	謙虚〃	マゾ　〃	5″
JK	6	従順〃	依存　〃	6″
LM	7	親和〃	同調　〃	7″
NO	8	保護〃	救済　〃	8″

制的）

しかも，実際には，純粋型よりも，二つのレベルで診断の異なる《混合型》の方が，はるかに多い。

〈例〉 Ⅰ－S　Ⅱ－S　　Ⅰ－S　Ⅲ－S

指導的－競争的（1　2），親和的－依存的（7　6″）

その組合わせは厖大となり，そのすべてを考察するのは，困難である。

そこで，ここでは，程度のちがいはあるにせよ，少なくとも，二つのレベルで診断の一致する，8種の《純粋型》についてのみ，考察することにする。混合型の場合は，二つのレベルの診断用語の組合わせから，その内容を解釈すればよい。

③　多層的診断

なを，多層的診断には，先報のように，顕在的自己の二つのレベルの診断用語に，潜在的自己の二つのレベルの診断用語を組合わせ，さらにレベルⅣ（表現されない動機）を加えた，5層の人格構造について，総合的な解釈をすればよい。潜在的自己とⅣの診断用語は形容詞ではなく，テーマ（感情，動機）の名称になる。詳細は，先報を参照されたい。[25]

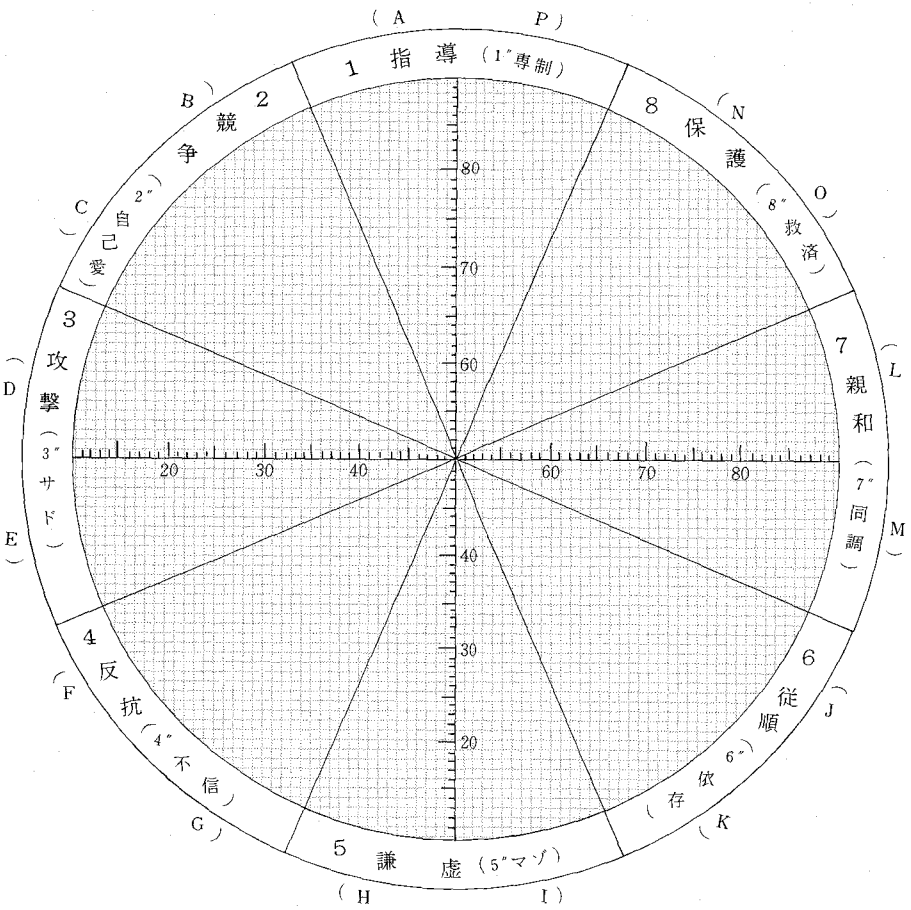

Fig. 1　診　断　図

Ⅱ　8種の純粋型について

1　指導的（専制的）人格
《力による適応》：ＡＰ行動

純粋型とはいえ，数字の診断コードによれば，11～1″1″までの，４通りの組合わせがある。穏やか（適度）な程度のものを，指導的人格とよび，極端（高度）なものを専制的人格という。このタイプの人は，人を指導したり，教えたりすることによって，人から尊敬や服従を求めようとする。対人関係の戦術として力（power）による適応を，お得意のレパートリーとする人である。

ところで，力の表わし方は多様にある。それに応じて，指導者，専門家，権威者，政治家，有力者，資産家，管理職，学者，教師，芸術家，スター，ヒーロー，アイドルなどと呼ばれる。

①　顕在的レベルの主動機

これらの人びとは，顕在的に，《力への渇望》，すなわち，支配欲，権力欲，野心，達成動機，完全欲などが強い。

②　ＡＰ行動の目的

力による適応を使うのは，それが対人関係における不安の回避（積極的には，安全と自尊心の維持と高揚）に効果的なことを学んだからである。このタイプの人が，最も安らかに感じ，生き甲斐を感じるのは，人や事物を支配している時である。この人々の安全は，人から愛され，受容れられることにではなく，人から服従され，尊敬されることにかかっている。

最も恐れるのは何か？それは，弱さと無知である。人からの尊敬や服従を失い，または，反抗される時である。自分の弱さを思い知らされたり，受身の立場におかれたり，不確かなこと，当惑することに直面する時には，不安になる。

③　ＡＰ行動の対人効果

力や指導力をもつことは，相手から〈服従と尊敬〉を引出しやすい。

ＡＰ⇌ＨＩ，ＪＫ

勢力のある人，知恵のある人，専門家は，人から指導や教えを求められ，尊敬されやすい。

④　対象選択（どんなパートナーと結びつきやすいか？）

ａ）指導的な人は，自分を尊敬し，服従してくれる人を求め，そういう人と結びつく時に，最も安全を感じる。したがってＨＩ（謙虚な），ＪＫ（従順的）の人との間に，もちつもたれつの相互的関係が成立しやすい。これを，対人関係のパターンの相性という。政治家は国民を必要とし，教師は学生を必要とする。それが得られない時には，無力を感じる。この無力感こそ，指導的な人の最大の脅威であろう。

ｂ）指導的な人は，自分と同じタイプの人とは結びつきにくい。強者同志では，互いに反撥し，勢力争いが起きるであろう。したがって相性は最も悪い。

⑤　極端（高度）な場合

力による適応の最も極端（高度）なものを専制的人格という。独裁者，権力欲の鬼，権威主義的人格，過度の野心家，立身出世主義者，ペダンティスト（専門家気取りのニセ学者，ニセ芸術家）などがある。完全癖の強い人も，全智全能への強迫に駆り立てられる。一見すれば理想の高い人に見えるが，実は，その根底には不完全恐怖がある。それがあればこそ，完全のみ

せかけに駆り立てられるのである。

このような人びとは，〈弱さと不確かさ〉を恐れ，完全無欠の強者，権威者たらんとして，必死の努力をする。そのために，少しの弱さも失敗も許せない。精力的，勤勉な世にいう“モーレツ派”の努力家ではあるが，その根底にある《力への渇望（Power motive)》に駆り立てられ，安らぎやくつろぎを知らない人である。また，愛とか協力の喜びを知らず，“ビューティフル”な生き方を知らない人である。Adler，A. のいう《劣等感の補償としての権力欲》とは，これのことであろう。一見強そう，実は弱い人である。弱いからこそ強さを求めざるをえないともいえよう。伝統的な精神医学でいう，異常人格としての《強迫的人格》も，これに属する。それは，劣等感，マゾヒズムの反動形式（補償）として形成されるのであろう。

〈事例1〉：ニクソン

アメリカ合衆国第37代大統領，リチャード・ニクソンは，専制的人格の典型といえよう。彼は，「勇気と強さを好み，愛されることよりも，尊敬されることを望んだ」という。[10]「弱いとみられないこと，恥かしめを受けないこと，見下されないことを，異常に強く求めた」といわれる。[10] 決断と実行力のある政治家をめざしたニクソンにとっては，「権力欲と政治への執念こそ，彼の原動力であった」[10] のであろう。ここに，権力欲の権化としてのニクソンの本質がみられる。「強いニクソンは，実は弱かった。しかし，自分の弱さを努力で変えてきたニクソンが，そこにある」。[10]

彼の回想録によれば，ウォーターゲート事件により，ついに大統領の座を降りざるをえなかった時，ホワイトハウスでの辞任のあいさつの中で，次のように語ったという。「いつもベストを尽くしたまえ。他人が憎もうとも，きみを憎む者たちは，きみが彼らを憎んできみ自身をだめにしないかぎり，きみに勝つことはないのだということを」と。[6]

なお，この回想録の原題も，ニクソンの面目躍如たるものがある。原題の〈Arena〉は闘技場を意味する。その副題は，〈勝利と敗北，そして再生〉である。不死鳥ニクソンにとって，人生とは，戦いであった。

2　競争的（自己愛的）人格
《競争による適応》：（ＢＣ行動）

これにも，数字の診断コードによれば，22～2″2″までの，4通りの組合わせがある。

優越感，自尊心，自惚れ，競争心が強く，人と張り合って勝っている時に安全を感じる。競争による適応を，対人関係のお得意のレパートリーとする人で，他人に対しては，利己的で，冷淡である。

①　顕在的レベルの主動機

顕在的レベルでは，競争心，自己顕示欲，名誉欲，出世欲，自己中心性，優越感が強い。

自分を実際以上に大きく見せたがり，目立ちたがり，出たがりである。能力や業績の優秀さを誇る者もあれば，容姿やファッション，学歴や地位，家柄や財産を誇りとする者もある。またオーバーな身ぶりで人目を引こうとする者もある。

②　ＢＣ行動の目的

このタイプの人は，優越感と自己賛美という，自己高揚（自己膨張＝自己のインフレ）によって不安を防ぐことを学んだ人である。

この人びとが，最も安全に感じるのは，他人の助けを受けず，独立している時，人と競争して勝っている時である。人と競争して勝つことが，この人びとの安全を支えている。

失敗，敗北，弱さ，人の評価を失うこと，無視されること，人に依存することは，最大の脅威となる。人に対する協力や信頼，優しさは，弱さのあかし，危険なものとして恐れる。

③ BC行動の対人効果

競争と自己賛美（自慢，優越感）は，他者から劣等感，または賛美を引出しやすい。

BC⇌G，H，I，J

人びとは，彼を見上げ，羨む。しかし，心から尊敬はしない。嫉みと反感，恨みを買いやすい。

〈指導的人格との差異〉

a）この競争的人格は，強者として振舞う点で，指導的人格と類似するが，愛の要素の程度が異なる。指導的な人は，その実際の強さによって，他者からの服従や尊敬を得る。それに対して，競争的な人は，他者に対しては，冷たい利己的な人である。彼らが人に近づくのは，自分を賛美してくれるファンとして，または，自分の道具として，他者を利用するためであり，他者を愛するからではない。自己愛の強い人は，自己賛美の（自分に惚れこんでいる）ために，基本的に他者を愛することはできないのである。

ナーシシストは，自惚れが強いのみではない。有名になるためには，手段をえらばない。他人を冷たく拒否し，烈しく競争する。他人を蹴落としても平気である。本来，目的のためには手段を選ばない人である。拒否的，利己的，搾取的で，他人を道具として利用することに，巧みである。

また，他者の成功や強さには，我慢できない。そういう相手に対しては，競争心をかき立てられ，争奪しないではいられない。

さらに，弱者に対しては，蔑視的である。人間を優者と劣者に二分してとらえ，優－劣のタテの人間関係しか，わからない人である。したがって，他者（敗北者）からは，嫉みや劣等感を引出し，心からの尊敬や服従を引出すことは少ない。

b）実際の強さの差異

指導的な人は，有能であり，権威者，成功者であることにより，人から尊敬や服従を受ける。それに対して，競争的な人は，自分の実際の人柄や能力や，業績によってではなく，自己の過大視（自己のインフレ）によって，自分を実際以上に大きく見せかけることにより，人目を引こうとする。虚栄的，演技的で，有名無実の誇大広告をする。彼の優越感は，実際の優越とは異なる。劣等感の補償としての〈偉大さの見せかけ〉に他ならない。

④ 対象選択

a）ナーシシストは，自分を賛美してくれる人，自分の道具として利用し，搾取できる人を求める。HI（謙虚な，劣等感の強い人），JK（従順な人）を求める。スターは，ファンを必要とし，女王蜂はとり巻を必要とする。しかし，その利己的で，人に対しては冷淡，拒否的であることから，かえって，人から無視され，敬遠されやすい。したがって，他者との親密な結合は困難である。

b）競争的なナーシシスト同志の間では，烈しい競争が起き，両立し難い。

⑤ 極端（高度）な場合

競争による適応の極端なものを，〈自己愛人格〉という。これには，文字通り《ナーシシズ

ム》：水に映りし，わが姿に惚れ込んだナーシサスに由来する自己愛者がある。《露出症》：身体的露出の他に，精神的露出症者もある。彼らには，“俺が俺が”の自己宣伝，自慢が多い。その他には，自分を偉大な成功者と思い込む《空想癖》，ヒステリーの《空想虚談症》，《ほら吹き》，《嘘つき》，《詐欺師》などもある。

精神病の診断類型の一つ，躁うつ病の躁状態（manic）の《誇大妄想》は，最も極端な例であろう。

異常性格の一つとされる《ヒステリー性格》も典型的な例である。勝気で，自己顕示欲，虚栄心が強く，自己中心的で，ひとりよがりであり，派手好きで，人には冷たい。

その他にも，一般にみられるものとして，立身出世欲の鬼，名誉欲の権化といわれる人びと，世にいう“東大病患者”のような，《有名病患者》もある。

これらの人びとの中には，小児的万能感をもち続けた未熟人格のみではなく，むしろ，劣等感の補償（裏返し）としての〈万能感〉をもち続けた人の方が，はるかに多いのではないか。そこにみられるのは，劣等感の補償のメカニズムである。優越感，尊大さ，高慢さ，勝気さの見かけの内面には，劣等感，卑小さ，弱気が潜在する。“弱い犬ほど，よく吠える”という。卑小，劣等を感じればこそ，偉大な者としての見せかけを，せざるをえないのではないか。

〈事例2〉：カサノーヴァ

ドン・ファンと並び称せられるカサノーヴァは，虚栄心の強い，実は弱い男であった。彼の生涯を女たらしに駆り立てたのは，一体，何であったのか？それは，自分の偉大さを，自分自身に確信させようとする欲求であった。彼にとっては，異性を征服することが，彼の自尊心の支えであった。“恋の成功者”となることによって，自分を偉大な〈スーパーマン〉と感じたのである。弱い男の，劣等感の補償としての自己顕示欲の，典型例であろう。

〈事例3〉：アンデルセン（アナセン）

アンデルセンの童話作品は，豊かな空想と美しい感情につつまれ，優しさと暖かい愛にみちている。たとえば，「人魚姫」は，献身的な愛の貴さを，美しくうたいあげた，感動的名作と評されている。(11)

しかし，アンデルセンその人の晩年は，作家としては，世界的名声を博し，名誉と幸福の中で暮らしたが，人間としては，人に好かれず，尊敬もされなかったという。(17)

貧しい靴屋の子として生まれ，父とは早く死別し，祖父は発狂し，母はアルコール中毒であった。このような逆境に育った彼は“俳優になりたい”，“歌手になりたい”と，ひたすら“有名になるために”，野心を抱いて都会に出，貧しい生活を送っていた。(17) 幾多の苦難の後に，望み通り有名にはなった。しかし，“有名病”にとりつかれたアンデルセンは，その度外れた名誉欲と高慢さのために，人には好かれず，孤独でさびしい一生を終えたという。(17)

アンデルセンの中には，豊かな想像，美しい自然を愛する心と共に，度外れた名誉欲と高慢さが宿っていた。しかも高慢さと共に，強い劣等感を抱き続けていたといわれる。(17)

ところが，彼の自伝「わが生涯の物語（メルヘン）」は，次のような一行から始まっている。「私の生涯は，波瀾に富んだ幸福な一生であった。それは，さながら一篇の美しい物語（メルヘン）である」と。(18, P.3)

アンデルセンは，自叙伝さえも，自分を主人公とする，美しい物語（メルヘン）として描こうとしたのである。メルヘンの創造によって，この世を天国に化身させることで，辛うじて救いを見出せたのであろうか。

アンデルセンの美しいメルヘンは，空想や夢と同じく，《願望充足》であったのではないか？孤独や無力を感じればこそ，なをさら，美しいメルヘンの世界を創造せざるをえないのではないか？そこにもアンデルセンのパーソナリティが覗われる。

3　攻撃的（サド的）人格
《攻撃による適応》：ＤＥ行動

数字の診断コードによれば，33～3″3″まで４通りの組合わせがある。他者に対して，批判的，攻撃的な人である。攻撃には，社会で認められている正当な，批判，論争，非難から，反社会的な攻撃行動（非行，犯罪）まであるが，身体的，または言語的手段で，人を脅し，傷つける行為は，すべて攻撃行動である。

①　顕在的レベルの主動機

このタイプの人は，顕在的に，正義感が強く，不正，不義を赦せない。攻撃欲（敵意），外罰性（他者非難）の動機が強い。

②　ＤＥ行動の目的

攻撃的な人は，対人関係における不安の回避に，最も効果的な手段として，《処罰と攻撃》を学んだ人である。こういう人は，攻撃行動によって，“私は危険で，恐ろしい人間だぞ”というメッセージを，他者に伝える。

彼らが，最も安全に感じるのは，厳格な批判者，処罰者として，人を畏怖させる時である。即ち，人をいじめ，残酷に振舞っている時に，不安が最も少ない。したがって，攻撃行動の目的は，人を脅し，威圧することによる不安の回避である。愛や同情のような，《優しい感情》は，彼らにとっては脅威となる。それに出会うと，当惑し，不安になる。

正義は自己に帰し，不正，不義は他者に転嫁する。非難を恐れる外罰者（他責的な人）は，弱点の否認と投射により，他者を非難することによって，自己を守ろうとするのである。

③　ＤＥ行動の対人効果

処罰的，批判的行動は，相手から，憤慨，不信と共に，恐怖と罪悪感，屈服を引出しやすい。

ＤＥ⇌ＦＧ，ＨＩ

④　対 象 選 択

口やかましい人，攻撃的な人がいると，大抵の人が不快になり，避けたがる。極端な攻撃は，人と人との結合を妨げる。しかし，“たで喰う虫も，好き好き”という。いじめたい人には，いじめて欲しいという相手がある。

ａ）サドーマゾの関係

サディストはマゾヒストと結合しやすい。攻撃的，批判的行動が，固定し，極端になったのが，《サディズム》である。但し，サディズムは，性的倒錯現象としてのサディズムとして有名であるが，性的倒錯としてのサディズムは，サド的人格の性的領域への表現であって，その逆ではない。

サディストは，嗜虐症といわれるように，人を攻撃し，いじめている時に，安全を感じる。マゾヒストは，いじめられ，軽蔑される時に，最も気楽に感じる。こうして，いじめたい人と，いじめて欲しい人との間には，もちつもたれつの共生的関係が成立し，永続しやすい。

ｂ）ＦＧ型の人との結合

処罰者は，犯罪者を求める。警察は犯人を求め，道徳的サディストは，不道徳漢を求める。正義の人は，悪いやつらを求める。

罰を受ける側の人も，同様に，罰を与える人を〈求める〉。犯罪は，罰を引出す。(犯罪者は，罰を求める！)。反抗は，訓戒を引出す。職業的革命家は，政府の圧制を〈求める〉。

こうして，反逆者と処罰者との間にも，永続的な結合を生じやすい。常習犯罪者は，刑務所に入っている時に，最も気楽に感じるともいわれる。

但し，結合とはいえ，愛による結合ではない。攻撃的人間は，人を愛すること，尊敬することはできない。たゞ嫌悪し，軽蔑し，非難するのみ。愛や親和のような優しい感情は抑圧されている。

また，攻撃的人間は，強者ではあるが，憎しみをもつ点で，指導的人格とは異なる。指導的な人は，指導し，教え，命令する。相手からは，尊敬や服従を引出しやすい。それに対して，攻撃的な人は，人を脅し，いじめ，破壊しようとする。その力を憎しみの方向に注ぐので，相手からは，恐怖や恨みを引出しやすい。

⑤　極端（高度）な場合

攻撃的人格の極端なものを，サディスト（サディズム：嗜虐症）という。情性欠如型の精神病質といわれる，残忍冷酷な殺人鬼，強姦魔，などがある。軽度なものとして，鬼検事，暴君がある。さらに軽度なものとして，日常周知のものもある。かんしゃくもち，ガミガミ屋の小言幸兵衛，意地悪婆さん（爺さん），いじめっ子，口の悪い人など。

4　反抗的（不信的）人格
《疎隔，不一致による適応》：ＦＧ行動

これにも44～4″4″までの，４通りの組合わせがある。このタイプの人は，他者との間に一線を画し，一貫して不一致と不信の態度をとる人である。世間との不一致や，懐疑，反逆は，適度なものであれば，個人にとっても社会にとっても望ましい。すべての創造や改革は，伝統的なもの，現状に対する反逆行為である。自律的，独創的，個性的な生き方をする人となる。《疎隔による適応》を，お得意のレパートリーとする人である。

①　顕在的レベルの主動機

主体性，自律性，独創性，抵抗精神に富み，ネガティヴな面では反抗心，不信感，恨みが強い。

②　ＦＧ行動の目的

他者との間に，距離をおき，親密さを避けることにより，不安を防ぐことにある。慣例的なものを拒むことにより，自己の主体性，独自性を確保する。人と親しむこと，人を信じること，人と協力・一致することは，耐えがたい脅威となる。そこで，人の好意や援助を拒むことになる。過度になれば，世をすねたひねくれ者や，犯罪者にもなり得る。人の好意も悪意に解し，人の好意にも，憎しみをもって応えることになる。

創造性，犯罪，精神分裂病は，世間に対する不一致，反逆の点では共通する。しかし，成功した反逆者は，先覚者，発明家，革命家として尊敬されるが，失敗した反逆者は，人から嫌われ，罰を受ける。

③　ＦＧ行動の対人効果

反抗，不信は，相手から〈拒否〉と〈処罰〉を引出しやすい。

FG⇌C，D

反抗，不信の戦術は，きまって相手から排斥や非難を引出し，それによって，他者との間に距離をおき，孤塁を守るのに役立つのである。

④ 対象選択

拒否や裏切りが，反抗，不信を刺激し，それが新たな排斥や罰を引出す。これがさらに，恨みや不信を強める。（CD→FG→CD→FG）

このようにして，反抗的な人は，自分の周りに，拒否的，処罰的な世界を作りあげ，不平とペシミズム，不信感を抱く。慣例的なものへの不一致と，他者からの疎隔による防衛をえらぶのである。したがって，他者との親密な結合は，もともと困難である。

a）反抗的な人には，独身者が多いといわれる。彼の安全工作（人を信じられず，他者の愛や援助を，意地悪く拒否すること）が，親密で，永続的な協同生活を妨げるからであろう。

b）共生的関係としては，拒否し，処罰する人との交渉が，つきまとう。但し，それは，くされ縁，悪因縁である。

⑤ 極端（高度）なもの

a）極端な例としては，精神分裂病がある。他者との密接な接触を避け，孤立して《自閉的世界》に住む。妄想，幻覚の如き非現実の世界を作りあげ，脅える。

分裂病質といわれる異常人格も，これに準ずる。

b）それに次ぐものに，パラノイア（偏執病）がある。闘争パラノイアでは，自信満々で，自分だけが絶対正しいと盲信する（狂信的）。猜疑心，被害意識が強く，他人が不当に自分を圧迫すると曲解し，自分の権利を主張して，とことんまで戦う。革命運動家，または，革命運動に参加する者には，真の革命家ではない，猜疑心や不平不満の強い，パラノイアの人がいる。

c）自閉症の他に，ヤングの自閉傾向，アパシー（無気力，無関心，無感動）や，おたく族といわれる人びとがある。外界との接触を避け，自分の趣味などに没頭する。特にモノへの執着が強い。

d）より軽度のものには，ペシミスト，ブツブツ屋，へそ曲り，皮肉屋，だれに対しても“ノー”という“ノーマン”，奇人，変人といわれる人，常習犯罪者などがある。

〈事例4〉：おたく族

相手のことを，“おたく”と呼び合う若者をいう。名前で呼ばないどころか，相手の顔もろくに見ず，人とまともに向き合わない若者が増えているという。[12]

今の子どもたちは，直接的なつき合いよりも，メディアを通した（間接的な）つき合いを好むといわれる。[8] 友だちと話すのも，電話かパソコン通信が主で，つき合うのも，TVゲーム，パソコン，ビデオ，バイク，マンガなど，〈モノ〉を介さないと，うまくできない。内気で，おとなしい，自己表現の下手な若者たちの見つけた，新しいコミュニケーションの手段ともいえる。

この他に，友だちができない。人の中に入れない，一緒に食事ができない，集団が恐いという若者も増えている。対人困難症，会食恐怖症，トイレ恐怖症，かかわり恐怖症なども，その一部である。

これらの原因は，複合的である。核家族化と少子化，地域での子ども集団の崩壊，おとなも子どもも多忙化して，ろくに顔も合わせないこと，子ども部屋の普及から，小さい時から個室

にこもり，人と遮断されてきたこと，独り遊びの機械ばかりになじみ，人とつき合えないことなどが，挙げられる。[12] さらに，受験戦争で，対人交流の場を奪われ，人づき合いの訓練の不足などもあろう。[7]

この“おたく族”の本質は，他者からの疎隔と自閉などの，非社会性にある。したがって，消極的な反抗的人格の一例と考えられる。

〈事例5〉：三無主義（アパシー）

高校生の三無主義（無気力，無関心，無感動）が，いわれて久しい。いまや，この傾向は，下は小学生にまで，上は大学生から，若いサラリーマン（ヤングアダルト）にまで，広がりつつある。(小，中学生ではシラケといわれる)。大学生のアパシーが，スチューデント・アパシーといわれる。[28]

現代の若者には，アパシーに向い，何事にも，無気力，無関心に流れてゆく傾向が見られる。失敗しても気にしないし，あきらめも早い。何を問われても，“さあ”，“別に”，“何となく”が，彼らの常套語である。[15, Pp.70−71]

とりたてて感動もなければ，とりたてて反抗するのでもない。醒めており，シラケている。親や社会に反抗するとか，自分に絶望して苦しんでいるわけでもない。ただ，退屈と虚無感を抱えながら，漠然と生きているだけである。

モノ豊かな社会の中で，多くの若者が，感覚的娯楽志向で，現在中心的，自分中心的な生き方に向かっている。生きる意欲や未来への希望を失ない，やり場のない不満や無力感にとらわれて，ただ無気力で，虚無的な態度で過ごしているのである。

このようなアパシーを生み出す背景として，町沢は，次のように述べている。「日本独特の強烈な学歴社会や管理社会というものは，そこにそのまま入って行くしかなく，遊びたい欲求を抑えて，ただ黙々と勉強しなければならない社会である。そこでは，いやおうなく，感情が抑え込まれ，感情がうっ屈し，無感動になってゆくしかなく，そういう形で，この時代に適応しているのかもしれない」と。[15, P.74] つまり，「一見，病理的に見える無関心，無感動な生き方も，この時代の圧倒的な圧力，この複雑な情報化社会に適応するための，一つの方法なのかもしれない」と。[15, P.75]

そうとすれば，この無気力な若者たちは，生き苦しい管理社会に対する無抵抗主義によって，かえって時代の病理を告発しているのではないか。

5　謙虚的（マゾ的）人格
《自己縮小による適応》：ＨＩ行動

これにも，数字の診断コードによれば，55〜5″5″まで，4通りの組合わせがある。真面目で，良心的で，控え目な人である。自責の念が強く，内心の葛藤にくよくよ悩む。いつも自分を卑下し，小心で，引込み思案になる。《自己縮小による適応》を選んだ人である。自惚れの強い競争的人格とは対照的な，現代の若者には珍らしくなった，貴重なタイプである。

謙虚的な人は，穏やかな程度では，慎み深く，良心的な人となり，高度になれば，マゾヒズムとなる。

①　顕在的レベルの主動機

反省心が強く，謙虚で，自己卑下の傾向が強い。不安（劣等感，罪悪感），自責傾向が強い。

欲求不満に対しては，自己非難（内罰性＝自責的傾向）が強い。その目的は，自己非難による，他者からの非難の回避にある。

② ＨＩ行動の目的

不安の回避に，自己卑下を，最も効果的な手段として学んだからである。その目的は，自己縮小（退却と自己蔑視）による不安の回避にある。自分を実際以上に小さくし，目立つことを避ける時に安全を感じる。最も恐れるのは，目立つこと，自己主張，敵意の表現など，強さを表わすことである。したがって，このタイプの人は，一見弱そうに見えるが，実は，内面には強さを秘めている人である。

〈マゾ的人格の謎〉

a）性的倒錯としてのマゾヒズム（被虐症）と，人格傾向としてのマゾヒズムの区別。マゾヒズムは，普通，いじめられ，苦しむことによって性的満足を求める傾向と考えられている。しかし，Horney [3] によれば，マゾヒズムの定義には，三つの意味が含まれているという。(1)マゾヒズムが〈性的現象〉であること，(2)〈満足（快楽）の追求〉であること，(3)苦しみを〈求める〉こと。

しかし，(1)マゾヒズム現象の多くは，〈性的な現象〉ではなく，自我防衛の手段の一つであること。(2)〈満足の追求〉というよりも，自己放棄，自己縮小の手段による〈安全の追求〉とみるべきこと。(3)マゾヒズムが〈苦しみを求める〉というのは，核心にふれていないこと。マゾヒストは，好んで苦しみを求めるのではない。苦しみ，悩みは，彼が必死で求める目的のための代価に他ならない。その目的とは何か？　それは《安全》であると。[3, Pp.198−200]

それでは，マゾヒズムの核心は何か？　それは，傷つき破れた孤独な人間が，《依存と退却》によって，人生とその危険に対抗しようとする，痛ましい試みであるという。[3, P.220]

したがって，性的倒錯としてのマゾヒズムと，人格傾向としてのマゾヒズムとは区別しなければならない。性的倒錯としてのマゾヒズムは，人格傾向としてのマゾヒズムの性的領域への現われであって，その逆ではない。

b）マゾヒズム的人格の二大特徴

(1)　自分を過小にする傾向：ナーシシズムは，自己膨張の傾向であり，自分を実際以上に過大視する。それに対して，マゾヒズムは，自己縮小の傾向で，自分を実際以下に過小評価する。ナーシシストは，どんなことでも出来ると考えるのに，マゾヒストは，自分には，とても出来ないという無力な態度をとる。ナーシシストは，注目の的になりたがるが，マゾヒストは，目立たぬよう，隠れたがる。

(2)　人に頼る傾向：マゾヒストにとっては，依存は絶対の必要条件である。他者の愛と友情がなければ，とても生きてはいけないと思う。愛情も，成功も，名誉も，そのすべてを相手に求め，控え目にへり下りながら，自分では気づかぬうちに，寄生的になり，べったりとすがりつく。[3, Pp.201−202]

なお，Horney は，２大傾向を指摘するが，筆者は，もう一つの傾向を強調しておきたい。

(3)　葛藤する態度：マゾヒストの他者に対する期待は貪欲になる。いいえ結構ですと遠慮しながら，他者のちょっとした無視や軽視にも敏感であり，深い憤りを抱く。勿論，この怒りは，直接には表現されない。相手の保護を失うのを恐れる余りに，他者に対する非難は，極力避けざるを得ない。こうして，マゾヒストの対人関係には，頼る人に恨みを抱くという，〈依存と反抗〉の内的葛藤（ambivalence）がつきものになる。[3, Pp.207−209]

③ ＨＩ行動の対人効果

自己卑下という行動は，他者に対して，“私は弱く，劣った者です”というメッセージを伝える。それは，他者から軽蔑や傲慢な優越感と共に，保護と同情や，指導を引出しやすい。

ＨＩ⇌ＤＥ，ＢＣ，ＮＯ，ＡＰ

弱者，劣者として振舞うことにより，相手から，軽蔑や同情を引出しやすい。

④ 対象選択

ａ）自己卑下の強い，謙虚な人は，自分の頼れる強者か，保護者を求める。

ＡＰ，ＤＥ，ＮＯ

ｂ）マゾヒストは，サディストと結びつきやすい。

ｃ）謙虚的な人は，従順な人（ＪＫ）とは結びつくにくい。どちらも強いリーダーか，頼もしい保護者を必要としているために，お互いの欲求を充たせないからである。

⑤ 極端（高度）な場合

極端（高度）なマゾ的人格の臨床像としては，うつ病，マゾヒズム，強迫観念，抑うつ神経症，自罰行為などがある。

その他，異常性格としては，神経質性格がある。不完全感，劣等感，罪悪感の強い人である。ＭＭＰＩでは，Ｄ尺度，Ｐｔ尺度の得点が高い。

⑥ そ の 他

ａ）謙虚的な人の罪悪感と自責傾向は，完全癖と同様，非難されることの恐怖への防禦と解される。自ら罰することにより，他者からの非難を，未然に防ぐのである。

また，他者に対する敵意の表現を防ぐための，防波堤でもあろう。

ｂ）謙虚的な人は，遠慮，気がね，不安（予期恐怖）により，ブレーキ過剰である。常に接近一回避の葛藤を経験しやすく，悩みやすい。そのために，積極的な自己主張が難しい。無口で，自己表現が乏しい。しかし，内面には豊かな思いや強さを秘めている。ロマンティックな憧れをもつ，理想主義者が多い。一見，暗く，弱そうに見えるのは，強さや自己主張を制止，又は抑圧しているからである。一旦，抑圧を緩和して，内に秘めたる強さを発揮すれば，すばらしい力を発揮する人である。

〈事例６〉：ショパン

即興演奏の天才で，“ピアノ詩人”と呼ばれたショパンは，フランス人の父とポーランドの貴族の血を引く母との間に，生まれた。四人きょうだいの中，唯一の男の子のショパンは，母からは勿論，三人の姉妹からも，“小さなお母さん”のように可愛がられた。このような女性的雰囲気が，幼時からの虚弱な体と相俟って，ショパンの女性的傾向を培ったといわれる。[13, Pp.14−16]

ショパンは，謙虚で，内気で，繊細な感受性をもち，優柔不断であった。また，純粋で，貴族趣味も強かった。

子どもの時から，演奏会ぎらいで，名ピアニストでありながら，生涯に行なった演奏会は，30回を数えるにすぎない。それも，自分から進んで行なったものは少ない。[26, P.235] ショパン自身，「わたしは演奏会に不向きで，聴衆の前に出ると，心は怯え，身体は麻痺して，窒息してしまいそうだ」と語ったという。[26, P.237]

ショパンは，大げさな身ぶりのベルリオーズを嫌い，衒学と気取りに塗り固められたリストのきらびやかを尊敬せず，ベートーヴェンに対しても，共感を覚えなかった。彼の愛は，純粋

無垢なモーツァルトに，彼の信仰は，偉大な父，ヨハン・セバスチャン・バッハに捧げられていた。(9, P.240)

ショパンのピアノ演奏は，決して大きな響きによって，聴衆の心をつかもうとはせず，「親しい人に語りかけるような，あまりにも優しく，ほとんど暗示的なささやき」で，ピアノを歌わせたという。(9, P.241)

しかし，又，ショパンは，常に男らしくて，力強く，能動的な友人を求め，彼らを理想化していた。男らしい友人の中に，自分に欠けているものを求めていたといえよう。(9, P.243) ショパンが同棲した唯一の相手，ジョルジュ・サンド（ペンネーム）は，六才も年上の，男まさりの才女であり，精神的にも，はるかに成熟した女丈夫であった。常に，ショパンを“かわいいもう一人の息子”，“坊や”と呼んでいた。(9, P.244) 他方，ショパンも，サンドを，“私の主人”と呼んでいたという。(13, P.101) これは，愛人関係というよりも，母子関係といった方がよい。

しかし，ショパンの中には，繊細で優美な感受性，感傷的で夢見がちな女性的傾向のみならず，強い男らしさへの憧れがあったと思われる。彼は，抒情的なノクターン（全21曲）を書くかと思えば，勇壮なポロネーズ（全17曲）を書く。パリのサロン趣味を反映するワルツ（全20曲）やプレリュード（全24曲）を書くかと思えば，ポーランドの土の匂いの漂うマズルカ（全60曲）を書いた。

ショパンの中には，二つの相反する傾向の葛藤があったと推察される。その一つは，現実の自己像（女性的傾向）と理想の自己像（男性的傾向）の間の葛藤，今一つは洗練されたパリ趣味と，故国ポーランドの土俗的なものへの郷愁。

ショパンの音楽に漂う「憂愁のムード」(13, Pp.70−71) は，このような，二つの相反する傾向のせめぎ合いの故ではあるまいか？

6　従順的（依存的）人格
《従順による適応》：ＪＫ行動

これにも，66〜6″6″までの４通りの組合わせがある。

すなおで，人に頼るという《すなおさと依存》の手段によって，不安を避ける人である。従順による適応も，穏やかな形では，人を尊敬し，信頼し，すなおに従うという形をとるが，極端な形では，全く人にすがりつくことになる。

①　顕在的レベルの主動機

顕在的レベルでは，敬服の欲求，依存の欲求，被護の欲求が強く，人間信頼の念が強い。

②　ＪＫ行動の目的

この人々は，自己主張を避け，人を尊敬し，信頼し，人に頼る時に，不安が一ばん少ないことを学んだ人である。すなおな依存の目的は，従順と依存による不安の回避，安全の確保にある。したがって，敵意や独立心，力という強さの表現は，極力避ける。すなおで，おとなしい人である。

③　ＪＫ行動の効果

すなをな依存という行動は，“私は，心から，あなたを信頼しています，”“私は，あなたの助けを求めている，無力な者です”というメッセージを伝える。そこで，〈従順と無力さ〉は，相手から，指導と援助を引出しやすい。すなわち，依存は，頼もしい指導と保護を引出しやす

い。

ＪＫ⇌ＡＰ，ＮＯ

人が，痛々しげに，頼りなげに，崇拝的態度で振舞えば，相手を刺激して，指導，助言，同情，保護という，“パトロン反応”を引出しやすい。

この自動的な対人反射を利用して，人の同情を引くために，わざと頼りなげに振舞う者もある。いわば，“母性本能”に訴えて，保護反応を刺激する“甘えっ子”である。

④ 対象選択

ａ）一般に，従順な人は，強い，頼もしい保護者を求める。すなをな，依存的な人は，頼もしい，強い人によりかかっている時に，一番安心する。可愛いベビーは，パトロンを求め，悩める人は，カウンセラーを求め，迷える人は，救世主を求める。

ＪＫ行動の効果は，相手をして，強者，保護者の役割をとらせることにある。その結果，お互いの役割を一そう強化しやすい。したがって，おとなしい，依存的な人と，頼もしいパトロン的な人（ＡＰ，ＮＯ）との結びつきは，共生的になりやすい。過保護の母親と弱虫の甘えっ子の結合，おとなしい依存的な夫と強い支配的な妻との結合は，強固なものになりやすい。お互いに，相手の反応を強化しやすいからである。

ｂ）但し，無力な依存が，常に，保護や指導を引出すとはかぎらない。求める者と与える者，弱い者と強い者の相互的関係は，蓋然的であり，必然的ではない。相手のパーソナリティによる。

ナーシシストは，人に頼られると脅威を感じ，冷たくつき放す。攻撃的な人は，人に頼られるのを嫌う。ひどいマゾヒストは，他人がどんなにすがろうとしても，保護することはできない。不信感の強い反抗的な人は，すなをな，無力な人には，イライラする。したがって，これらの相手とは，永続的な関係は成立しにくい。

⑤ 極端（高度）な形式

ａ）すなをな依存の臨床的表明は，顕在的不安（不安，心配，恐怖，無力感）の高いことである。不安神経症，恐怖症，心気症などが，それである。

ｂ）未熟人格：ピーターパン・シンドロームといわれるように，いつまでも，甘えっ子，依存的で，世間知らず，利己的で，忍耐力がなく，苦労を嫌がる幼稚人格。これらは，すべて，症候の形で，“私は無力で弱い者です，どうか私を助けて下さい”と訴えているのである。現代の青少年に蔓延している，成熟拒否の傾向（おとなになれない若者たち）は，その深刻な例の一つであろう。

〈事例７〉：おとなになりたくない子どもたち

1985年のＮＨＫの世論調査によれば，「早くおとなになりたい」と答えた子ども（小，中，高生）は，三割に満たず，残りの約七割の子どもは，「そうは思わない」と答えている。(16)

その三年後の1988年の中，高生のみの調査によれば，「早くおとなになりたくない」と答えた子は，55％であるが，この傾向は，年々増えているという。(15, P.53)

この「おとなになりたくない」という，モラトリアム的傾向は，教育年数の延長や，社会の高齢化，家庭での過保護な養育態度と相俟って，青年にまで広がっているといわれる。(16)

〈事例８〉：女子の思春期やせ症

男子のスチューデント・アパシーに対応する，女子の成熟拒否が，思春期やせ症である。

やせ症は，昭和40年代から女子学生に増えてきた。思春期，高校生くらいから始まり，食事

を食べなくなる。体重が30kgを割るほどやせてゆく。ときに過食する時期がくることもある。夜中に起き出して食べ，何でも食べてしまう。食べると下剤を服用して，みんな出してしまうこともある。

未熟さ，女性化拒否，女性同一性の歪み，それから生じる成熟不安，深い自己否定，不適応感からくる〈うつ状態〉など，これらを集約しているのが，やせ症である。

やせ症の本質は，成熟拒否にある。母親拒否，父親との癒着の形をとるが，母親拒否は，実は女性化拒否である。少女のような髪型をしたり，ボーイッシュなスタイルをしたり，中性的になる。一生結婚しないなどともいう。おとなになることへの不安から，万年少女的に固着しているが，その父母もまた，万年青年，万年少女的なところがある。(27, Pp.167−169)

7　親和的（同調的）人格
《一致による適応》：LM行動

これにも，77〜7″7″までの4通りの組合わせがある。愛想がよく，快活で，社交家であり，争いを好まず，常に人と折り合い，世間との調和を考える，常識家である。また，すべてを善意に解釈する楽天家であり，人と争うことを嫌い，友好と調和によって問題を解決する人である。人間不信の反抗的な人とは正反対に，人間信頼と協調に生きる人である。男性では，快活で気のよい好青年であり，女性では，明朗，快活で，愛想のよい，可愛い人である。共に，人に好かれ，人気がある。

① 顕在的レベルの主動機

親和，是認，受容，所属の欲求が強い。これらの欲求の根底には，人から排斥され，嫌われることを恐れる，孤独の恐怖がある。

② LM行動の目的

親和と同調の本質は，第一に，自己の独自性を抑えて，外部の価値と一致することにより，非難を避け，是認をかちとることにある。したがって，LM行動の目的は，親和と協調による安全の確保にある。この人びとは，人と調和し，仲よくする時に，最も安全を感じる。人に好かれ，人気はあるが，敵意や支配欲，あるいは，反抗心は，抑圧し，盲目的である。

第二に，争いを嫌い，人とちがうことを極端に恐れる。自分や他人の，いやな面には目をつぶり，世界をバラ色に見る楽天家である。また，くよくよ考えない，外向的な，現実家である。

この人びとに典型的な，〈楽天性〉と〈快活さ〉は，敵意や支配欲という危険な衝動を抑えるための“とりで”であろう。気楽で，快活なのは，危険な衝動は抑圧し，意識から排除してしまい，葛藤や問題を自分から切離しておけるからである。現実否認と抑圧による脅威の防衛といえよう。一見，明るいが，実は，根は暗い。

③ LM行動の効果

親和と協力は，相手からも親和と協力，優しさを引出しやすい。

LM⇌LM，NO

攻撃は，攻撃を引出しやすいが，スマイルは，スマイルを引出しやすい。外向的，楽天的な人は，自分を好くように相手を仕込むのである。

しかし，相互的関係は，蓋然的である。スマイルは，常にスマイルを引出すとはかぎらない。相手による。懐疑的な人は，他人の楽天主義に憤慨する。指導的な人は，協力や同意を，弱さ

の証據とみて，一そうボス的に振舞いやすい。

④ 対象選択

a）親和的な人は，自分の保護手段を脅かすような相手や，事態を避ける。独創的な人とか，反社会的な人，反体制の人，攻撃的な人とは結びつきにくい。

b）やはり，自分と同じ親和的な人や，保護的な人と結びつきやすい。その時に，一ばん安心し，落ちつけるであろう。

⑤ 極端（高度）なもの

親和的人格は，指導的人格や保護的人格と共に，理想とされやすいタイプであるが，親和と協調による生き方も，極端になれば，不適応となる。

a）第一に，人からの排斥を恐れる，孤独の恐怖の余りに，嫌なことも嫌とはいえず，自己主張を避けて，妥協しやすい。常に，人によく思われたい，人を歓ばせたい，人に好かれたいと，だれにでもよい顔をする。八方美人の“イエスマン”（ノーといえない人）になりやすい。しかし，人間は，怒るべき時には，怒らなければならない。そうしなければ，人間として駄目になるであろう。

b）第二に，万事目立たぬよう，人に遅れぬよう，“ふつうの子”でいようとする余りに，自己喪失になるおそれもある。独自性，個性を失ない，確固とした自分の信念もなく，その時々の他者の意見に左右され，流行や世論，集団の風向きのままに流される。土手の柳（風任かせ）になる。主体性のない，無定見の日和見になりかねない。

自分がどう思うかということよりも，人がどう思うかに関心する“他人指向型”のレーダー人間となる。集団への逃避による不安の回避に向う。ひとりでは何もできず，群をつくりたがる。自分の重心は自分の中にはなく，世論や，他人の意見にある。

c）親和的人格の臨床像

高度になれば，そううつ病，ヒステリー（無反省，盲目的，自己中心的，内心の問題には無自覚）がある。それより軽度のものには，保守的な慣例主義者，八方美人の主体性のない人がある。

〈事例 9〉：集団的神経症

Frank1 によれば，第二次大戦後の現代人は，生きる目標を失い，生活の無意味感にさいなまれ，《集団的神経症》にかかっているという。これは，臨床的な意味では神経症ではない，いわゆる“正常な”人びとの間に流行している“パラノイローゼ”である。(1)

その症状の第一は，〈宿命論的態度〉（運命の力への過信）である。人間は結局，外的，内的な力に翻弄されるばかりだという，個人の無力感をいう。その第二の症状は，〈仮の生き方〉である。明日は何が起こるか判らないという，未来への希望のなさによる，その日暮らしの生活態度をいう。その第三の症状は，〈集合主義的な考え方〉である。目立たぬことが大切だとして，集団（マス）への逃避と，強い指導者を歓迎する。その第四の症状は，〈狂信〉である。ただ一つの思想を絶対視し，他の考えをゆるさない。政治的，宗教的狂信に向かう。さらに，目的は手段を神聖化するとして，目的のためには手段をえらばない傾向をいう。

この《集団的神経症》の本質は，ニヒリズムであり，責任に対するおじけと，自由からの逃走に帰着する。これは，ファシズムや全体主義を受容れる心理学的基盤になる，危険なサインである。(1, Pp.17～42)

8 保護的（救済的）人格
《救済による適応》：NO行動

これにも，88～8″8″まで，4通りの組合わせがある。このタイプの人は，優しさと寛容（支持，同情，援助，保護）というパトロン反応に訴える人である。同情心の篤い，成熟した人として振舞う。強くて，有能で，自信のある，頼もしい人であるが，それを指導的な人のように，あからさまに示そうとはせず，愛のベールにくるんで，ソフトに表わす。人を支配するよりも，人と親密であろうとする。人を助け，相談にのり，同情する。優しくて，思慮があり，包容力に富む。ソフトで暖かく，頼もしい，成人らしい，父親または母親のような印象を与える。別名，パトロン型，カウンセラー型，キリスト型の人である。

① 顕在的レベルの主動機

同情心，養護の欲求が強く，愛する愛，与える愛という，成熟した愛の人であり，人を暖かく受容れる。そこで，人に慕われ，頼りにされる。

② NO行動の目的

これも，不安を防ぐのに，最も効果的なことを学んだからである。寛容であること，慈悲深く，成熟した成人であることが，この人びとの安全と自尊心を支えている。この人びとが，最も安全を感じ，生き甲斐を感じるのは，保護者的役割をとれる時，人の支えになれている時である。無力であること（依存や敗北＝弱さ）や，人との敵対を最も恐れる。NO行動の本質は，優しさと寛容による不安の回避にある。

③ NO行動の効果

頼もしい保護者，援助者として振舞うことは，他者から尊敬，依存と同意を引出しやすい。

NO⇌JK，LM

すなわち，優しく，同情心をもって振舞えば，信頼し，依存し，同意するように相手を仕込む。

④ 対象選択

保護者的な人は，《与える人》であり，《求める人》を引きつけ，また必要とする。そこで，保護者的な人は，頼れる人を求める依存的な人と結びつきやすい。救世主は，迷える小羊を求め，母性的な人は，頼りない甘えっ子を必要とする。カウンセラーは，クライエントを“求める”。

頼もしい父親とすなをな娘，母性的な妻と甘えっ子の夫，母親と依存的な子どもの結合などは，共生的になりやすい。但し，このような相互的関係は，蓋然的であり，必然的ではない。寛容と優しさが，常に尊敬と依存を引出すとはかぎらない。しかし，一般によいことを約束してくれる人には，よいことを期待しやすいものである。

但し，余りに過保護になると，この相互的関係も分裂しやすい。

a）献身的，無私的な親の場合：

(1) 子どものために，自分の一切を犠牲にする親の場合（東洋的な母子関係の場合）に，よくみられる。かえって子どもに憤慨やフラストレーションを起こさせやすい。余りに献身的な親に対しては，子どもは，自分のしたいことも自由にできなくなる。親の愛情，期待に応えなければならないという義務感と，自分の願望との間に葛藤を起こしやすい。

(2) また，過度の〈無私性〉は，貪欲（利己心，独占欲）の仮面にもなる。過度の献身（自

己犠牲）によって，相手を引きつけ，自分のものにすることもできれば，相手との同一視により，実は，自分自身を可愛いがっていることもある。どちらも，相手の独自性，自由を認めているとはいえない。それが証據には，子どもが自立してゆく時に，または，子どもが自分の気にそわない時には，大変なショックを受ける。

相手の人格を認め，相手の幸福を願う献身（成熟した愛の表現）と，エゴイズムの反動形成としての献身を見分けるには，〈その献身が，適度，合理的であるか，それとも度外れて，非合理的であるか〉，また，〈相手の自立（親離れ）に対して，それを喜ぶか，それとも，裏切りと受取るか〉を見ればよい。

b）余りに世話をやきすぎれば，おせっかい，干渉しすぎとなり，かえって敬遠されかねない。

⑤ 極端（高度）な場合

人に対する同情や援助は，愛の表現ではあるが，度を過ごした同情や献身は，不適応になる。

a）過保護（かまいすぎ），甘やかし（放任，溺愛）によって，人を無責任な弱虫にするおそれがある。

b）人のことに，要らぬ世話をやく，〈おせっかい〉にもなる。

c）心身症：人の責任を引受けすぎれば，責任の重圧がストレスの連続を招き，〈心身症〉の誘因にもなる。“管理職は早死にする”ともいわれる。事実，三大心身症といわれる心臓病，高血圧，胃潰瘍は，責任の重い管理職に多い。別名“マネージャー病”ともいわれる所以である。心のゆとりとくつろぎが必要である。

d）余りに寛容，献身的であろうとすれば，自分の個人的感情，個人的欲求も犠牲にせざるをえない。腹が立っても我慢し，与えるのみで，求めることができない。常に，世のため，人のために，自己犠牲を強いられると，個人的不満の蓄積が忍耐の限度を越えた時，爆発は必至であろう。それがどんな形をとるかは，個人の事情による。アルコール中毒になる人もあれば，賭けごとにふける人もある。仏のような人格者が，酔うと性的奇行に走ってしまうこともある。これらは，抑圧している衝動の爆発であり，ストレスの吐け口でもある。

Ⅲ おわりに

1 顕在的自己の二つのレベルの不一致について

① 純粋型と混合型について

第Ⅱ部で見たのは，人格の顕在的レベルの二つの下位レベル，すなわち，Ⅰ－S（公共的自己）とⅡ－S（意識的自己）とが一致する，純粋型のみである。しかし，このことは，純粋型が望ましく，混合型は，好ましくないという意味ではない。説明の便宜上，純粋型に限ったまでのことである。

それどころか，公共的自己（他者に見せている自己，他者に見られている自己）と，意識的自己（自分がそう思っている自己）とは，必ずしも，一致しない。これは，〈すること〉と〈思うこと〉の不一致をいう。むしろ，正常群では，純粋型は少なく，二つの下位レベルで異なる混合型が，はるかに多いのが常である。いわば，極端（高度）になるほど，（異常性が高くなるにつれ），純粋型となり，穏やか（適度）な程度の人ほど，混合型が多くなるのが普通であ

る。このことは，対人関係のレパートリーの広狭（先のグラフでの広狭）[24] と無関係ではない。レパートリーの広い（豊かな）人ほど，時に応じて柔軟に対処でき，レパートリーの狭い（少ない）人ほど，きまりきった，画一的な対応しかできない。これを〈硬い〉という。

このレパートリーの広狭の問題は，顕在的自己の二つの下位レベル（公共的自己と意識的自己）の間のみでなく，それぞれの単独のレベルについても妥当する。したがって，レパートリーの豊かな混合型の方がむしろ望ましいといえよう。

さらに，顕在的レベルと潜在的レベルの組合わせによる多層的診断においては，混合型はますます多くなる。

② みかけと内面について

a）公共的自己と意識的自己の一致・不一致の問題は，みかけと内面の問題にたとえられる。純粋型とは，みかけと内面の一致したもの，混合型とは，みかけと内面の一致しないものをいう。普通，みかけと内面（実際）とは，必ずしも一致しない。

一見，もの静かに見える人が，燃えるような情熱を秘めていることがある。ルンルン気分の明るい人が，実は根暗人間であったりする。一見強そう，実は弱い人もいる。一見，優しそう，実は，恐ろしい人もいる。外柔内剛の人もいれば，外剛内柔の人もある。「外面如菩薩，内面如夜叉」ともいわれる。美しいバラにはトゲがあるともいう。

まことに，人は〈みかけ〉によらない。みかけというのは，その人のすべてではない。みかけは人を欺くことがある。見かけ倒しのこともある。したがって，一人の人間を理解しようとするなら，もっと深い，その人の本質を知るべきであろう。それには，表面的，一面的ではなく，多層的，多面的な見方が必要とされる。

b）俗に“ネアカ”と“ネクラ”という。人間の多層性からみれば，みかけ（外面）は明るいが，内面は暗いのが，本来のネクラ（根暗）であろう。同様に，みかけは暗いが，内面は明るいのが，ネアカ（根明）であろう。

今回の代表例では，潜在的レベルについては，省略してある。しかし，顕在的自己と潜在的自己（Table 1）の間にも，不一致があるのが自然である。

たとえば，顕在的に強い者は，強さを生かし，弱さを抑圧している。したがって，潜在的レベルには，弱さを秘めている人である。同様に，顕在的に弱い人は，強さを抑圧している。したがって，潜在的レベルには，強さを秘めている人である。攻撃的な人は，親和の感情を抑圧している。したがって，潜在的レベルには，親和の感情を秘めている人である。同様に，親和的な人は，怒りや自己主張を抑圧している。潜在的には，攻撃性を秘めている人である。

この，みかけと内面のちがいは，光と影にたとえられる。光あるところには，必ず影がある。したがって，顕在的レベルのみならず，潜在的レベルをも考慮した，多層的な人格の見方が必要であろう。

2 第Ⅱ部への補足

① 反抗的人格の光と影

a）どんなタイプにも，プラスとマイナスの両面がある。光と影の如し。反抗的人格についても同様である。他者との疎隔，不一致といえば，悪く解されやすいが，必ずしもそうではない。反抗的人格のポジティヴな側面は，Fromm のいう《革命的人間》に相当する。[2]

革命的な人は，〈反抗者〉とはちがう。Fromm のいう〈反抗者〉とは，自分が認められず，愛されず，受容れられないために，権威に対して，深い憤りを抱く人をいう。(2, P.49) それに対して革命的人間とは，独立した人，自由人をいう。(2, P.53) 自分自身が自分の人生の源泉となる，真の生き方をしている人をいう。(2, P.56)

したがって，革命的人間は，(外圧に対して)，《否》といいうる人（服従しないことのできる人）である。(2, P.60) それは，現状に順応し，主体性のない，親和（同調）的人格とは対照的である。したがって，反抗的人格の，ポジィティヴな側面（主体性，自律性，抵抗精神など）の考慮が必要であろう。

b）ＩＣＬの改訂の必要性

筆者のＩＣＬの改訂版（1981）では，項目の通過率を重視した結果，反抗的人格のポジティヴな側面にかかわる項目が少なくなっている。

なぜならば，主体性，自律性などは，正に現代の青年には欠如している特質である。そのため，統計的データ（通過率）によるかぎり，反抗的人格のポジティヴな側面にかかわる項目の通過率は，極めて低くならざるをえない。

したがって，ＩＣＬ改訂版では合格しなかった，反抗的人格のポジティヴな側面の項目については，復活をはかる必要がある。この点は，次報にゆずりたい。

② 事例について

第Ⅱ部でとりあげた〈事例〉とは，実例というほどの意味である。特定の個人として挙げられないものは，高度な〈症状〉，または，典型的な〈生き方〉をとりあげた。典型的な例は，普通人には見出し難く，顕著な，極端な事例によらざるをえないからである。

a）但し，攻撃（サド）的人格と保護（救済）的人格については，事例を割愛せざるをえなかった。攻撃的人格の典型例としては，一度は，ヒトラーを予定したが，彼は単にサディスト（ＤＥ）であるばかりか，独裁者（ＡＰ）であると共に，ナーシシスト（ＢＣ）でもあるという，混合型であるために，典型例としては不適当であった。それに，今さら，サド侯爵を持出すまでもあるまい。

保護（救済）的人格の事例についても，特定の実在の人物名を挙げるのは困難である。強いて，典型例として挙げるとすれば，キリストやマザー・テレサのような人びとであろう。

b）《おたく族》と《三無主義（アパシー）》は，未熟人格として見れば，従順（依存）的人格に属するが，その対人関係の構えの点からすれば，現在の社会体制や教育体制に対する消極的抵抗（他者との疎隔・不一致）と見做されるので，反抗（不信）的人格の事例とした。

それに対して，《思春期やせ症》は，成熟拒否としてみれば，社会の基準への〈抵抗〉として，反抗（不信）的人格に属するかもしれない。しかし，いつまでも子どものままでいたい点を考慮すれば，未熟人格として，従順（依存）的人格の事例になり得る。

c）なを，スチューデント・アパシーについては，稲村の「若者－アパシーの時代」(1989) に，学ぶところがあったが，紙数の制約から，割愛せざるをえなかった。

3 そ の 他

① Leary, et al. の原典と筆者の改訂の区別

前報までは，Leary, et al. の原法と，筆者の改訂とは，すべて峻別してきたが，今回の，

対人関係の構え：その代表例の解説のみは，それが困難である。

Leary, et al. の原典（1957）[5] に準據はしているが，その後36年間にわたる実践研究の間に，改訂を重ねた結果，筆者の思考が多分に入り込んでしまった。その結果，今日では，どこまでが Leary, et al. の原典によるのか，どこからが筆者の増補，改訂によるのか，その識別は困難になってしまった。したがって，第Ⅱ部に記されたものは，Leary, et al. と筆者の合作というべきかもしれない。

但し，強いて区別すれば，次のようになる。8種の代表例の考察の中，①○○行動の目的，②○○行動の効果，③極端（高度）なもの，の一部分は，基本的には，原典に準據している。それに対して，④顕在的レベルの主動機，⑤対象選択，⑥事例（実例），⑦その他の4項目は，筆者による補足である。

② わが国における研究

筆者の対人的診断法に関する研究は，最初の紹介（1957）[19] 以来，「ＩＣＬ評定票」日本版作成の報告（1977）[20] 以外には，最近の一連の報告（1990，1991，1992）[21~25] に至るまでは，永らく公表していなかった。その理由は，一つには，実践研究という，特殊な研究法によるところが大であった。

Leary, et al. の人格の対人的診断法（1957）については，筆者の報告の他には，小嶋による，リアリィの対人的類型の紹介（1975）[14] 以外は，筆者は寡聞にして知らない。この組織的，包括的な人格診断法が，わが国で十分に評価されていないことは，誠に残念に思う次第である。

文　　献

1. Frankl, V. E. Pathologie des Zeitgeistes, Wien: Franz Deuticke, 1955.（宮本忠雄訳『心理療法の26章』，みすず書房，1957.）
2. Fromm, E. Dogma of Christ, Holt, Rinehart & Winston, 1963.（谷口隆之助訳『革命的人間』，東京創之社，1965，Pp.45－68.）
3. Horney, K. New ways in Psychoanalysis, N. Y.: Norton, 1938.（井村恒郎・加藤浩一訳『精神分析の新しい道』，日本教文社，1953.）
4. Leary, T. ed. Interpersonal diagnosis of personality, N. Y.: Ronald Pr., 1957.
5. Leary, T. ed. Interpersonal diagnosis of personality, N. Y.: Ronald Pr., 1957，Pp.269－350.
6. Nixon, R. In the arena : A memoir of victory, defeat and renewal, East-West Research Inc., 1990.（福島正光訳『ニクソン・わが生涯の戦い』，文芸春秋社，1991.）
7. 青木健次　「対人交流が不得手で，ピンチの学生生活」，朝日新聞，1989，6月6日号
8. 深谷昌志編　「シンポジウム・子ども」，現代のエスプリ別冊，至文堂，1990，p.148.
9. 福島　章　『天才の精神分析』，新曜社，1978.
10. 林ワシントン共同特派員　「ニクソンーその人①心理と性格」，愛媛新聞，1973，1月17日号.
11. 家村睦夫　「絵のない絵本」，「人魚姫」かいせつ，少年少女文学全集15，学研，1971，Pp.120－121.
12. 稲村　博　「若者にひろがる“おたく族”」，愛媛新聞，1989，10月11日号
13. 河上徹太郎　『ショパン』，大音楽家／人と作品7，音楽之友社，1991，第28刷.
14. 小嶋秀夫　「リアリィのモデル」，星野命・河合隼雄編，『講座心理学4，人格』有斐閣，1975，Pp.88－90.
15. 町沢静夫　『成熟できない若者たち』，講談社，1992.
16. ＮＨＫ世論調査部編，『いま，小学生の世界は』，日本放送出版教会，1985，p.64.
17. 岡田令子　「アンデルセンー即興詩人の素顔」，朝日新聞，1971，5月30日号.
18. 大畑末吉訳　『アンデルセン自伝』，岩波書店，1991，第10刷．p.3.
19. 戸苅正人　臨床心理学における診断の問題Ⅱ－パースナリティの対人的診断－，愛媛大学紀要，第Ⅴ部，第4巻，21－34，1957.

20. 戸苅正人　対人関係の研究（1）－ＩＣＬ性格評定票の作成－，愛媛大学教育学部紀要，第Ｉ部，第23巻，41－56，1977.
21. 戸苅正人　対人関係の研究（2）－人格の対人的次元について－，愛媛大学教育学部紀要，第Ｉ部，第36巻，1－10，1990.
22. 戸苅正人　人格の対人的診断法の研究（3）－人格のレベル（多層性）について－，愛媛大学教育学部紀要，第Ｉ部，第37巻，33－45，1991.
23. 戸苅正人　人格の対人的診断法の研究（4）－人格の対人的変数について－，愛媛大学教育学部紀要，第Ｉ部，第37巻，47－58，1991.
24. 戸苅正人　人格の対人的診断法の研究（5）－対人行動の測定法について－，愛媛大学教育学部紀要，第Ｉ部，第38巻，第2号，21－37，1992.
25. 戸苅正人　人格の対人的診断法の研究（6）－人格の多層的診断法について－，愛媛大学教育学部紀要，第Ｉ部，第38巻，第2号，39－56，1992.
26. 渡邊学而　『大作曲家の知られざる横顔』，丸善ライブラリー18，丸善，1991.
27. 山田和夫　「女子学生の病理」，笠原　嘉・山田和夫編，『キャンパスの症状群』，弘文堂，1981，Pp.167－171.
28. 山田和夫　『成熟拒否』，新曜社，1983，Pp.59－66.